

## 伽範達摩訳本『千手経』に見られる思想

金 浩 星

### I. はじめに

千手観音が説かれた陀羅尼 (= 千手陀羅尼 = 大悲呪) が中心となっている『千手経』はインドで成立された經典である。ところが、東アジアでは中国で翻訳された漢文の經典によって信仰・修行されてきた。それに国々によって異なる様子を見せてきた。インドの場合、『千手経』の信仰が密教の中に限定されて展開した。中国と日本(臨濟宗, 曹洞宗, 黄檗宗)は千手陀羅尼だけを抽出して読誦しているが、韓国では千手陀羅尼を抽出して置いて、その前後に他の陀羅尼とか意味が理解できる顯教的な部分などを附加・編集し、新たな儀軌を創造してきたのである。韓国ではこのように新しくつくられたものも『千手経』と呼ばれる。したがって、大蔵経の中の『千手経』と区別して呼ぶ必要がある。本稿では大蔵経の中の『千手経』を『原本千手経』と呼び、韓国で編集された儀軌としての『千手経』を『読誦用千手経』<sup>1)</sup>と呼びたい。

果たして、韓国の『読誦用千手経』と『原本千手経』を対比させて見ると、どのような同一性と差異性が見られるのだろうか。それらの問題に対しての答えを探していくためにも『原本千手経』に見られる思想がどのようなものであったかを考えなければならない。勿論、中国で漢訳された訳本は数種あるが、私は後代の『千手経』信仰において最も大きい影響を及ぼした伽範達摩(Bhagavaddharma, 尊法, ? ~ 650 - 655 ~ ?)の訳本<sup>2)</sup>を『原本千手経』として設定して、この問題に対して答えを探してみたいと思う。

### II. 「古本千手経」の設定

伽範達摩の訳本を細密に読んでいくと、『原本千手経』とは異なる二つの部分があるように考えられる。次の文章がそれらの境界である。

観世音菩薩、説此呪已、大地六変震動、天雨宝華、繽紛而下、十方諸佛、悉皆歡喜、天魔外道、恐怖毛豎、一切衆会、皆獲果証、或須陀洹果、或得斯陀含果、或得阿那含果、或得阿羅漢果者、或得一地二地三地四地五地、乃至十地者、無量衆生、発菩提心<sup>3)</sup>。

この部分は一般的な大乘經典の末端に出る表現と極めて類似しており、ここで經典が終わるような感じさえもする。これは何らかの必然的な理由があるものと判断され、その理由として、最初に『原本千手経』が成立された時、この部分で終わっていたのではないかと私は思う。これを境界として『原本千手経』の中に古層と後代に附加された部分があると思われる。本稿では前者を「古本千手経」<sup>4)</sup>と、後者を「附加部分」と区別<sup>5)</sup>して呼びたい。

上で引用した部分までが「古本千手経」であると判定することには、もう一つの傍証が挙げられる。伽範達摩の訳本の抄本<sup>6)</sup>であると考えられる不空 (Amoghavajra, 705-774) の訳本<sup>7)</sup>は、ちょうど上で引用した部分で終わっているからである。それでは、各々「古本千手経」と「附加部分」にはどのような思想が見られるのだろうか。本稿ではその一環として「古本千手経」に見られる思想を考察してみたい。「附加部分」に対しては次の機会に発表するつもりである。

### Ⅲ. 「古本千手経」に見られる三つの思想

一つのテキストに見られる思想を考察するためには、科目の方法論<sup>8)</sup>に立脚することが必要である。上で『原本千手経』を「古本千手経」と「附加部分」の二つに分けたことこそが、まさに科目の設定に他ならない。それはさらに分類できるが、つまり「古本千手経」をより細密に序分、正宗分、そして流通分の三つに分けられるのである。

まず、序分<sup>9)</sup>である。序分で『千手経』全体を引導している人は釈迦である。この部分で釈迦は、観世音菩薩が自分の存在を語るように機会を作っており、また観音が序分で示す神通に対する解釈や補充の説明を担当する役割をする。まだ、序分では本格的な思想は現れていない。それは次の正宗分を待たなければならない。

正宗分では釈迦の承諾を得、観音が陀羅尼を説かれている。しかし、陀羅尼の提示以前に観音が本願を立てる。正宗分も観音の本願と陀羅尼の提示という二つの部分に分類できる。観音の本願、すなわち陀羅尼を提示する前に観音が立てた

発願の中で、十願と六向<sup>10)</sup> はそのまま『読誦用千手経』にも編入されている。その順序も『原本千手経』のように陀羅尼の読誦以前に位置させている。その後で、千手陀羅尼が説かれている。したがって、「古本千手経」の編成をよく継承したと評価される。

「古本千手経」で説かれている順序とは逆に、まず「正宗分」の陀羅尼から考えてみたい。陀羅尼が説かれているから「古本千手経」は密教の經典であることは言うまでもない。特に、密教の成立史的な区分によっていえば、それは初期密教の經典ということができる。しかし、他の初期密教の經典との差異点は、現世利益のために陀羅尼が説かれているのではないということである。陀羅尼の読誦を通して三昧と弁才を得、罪業を懺悔することによって仏国へ往生することができるという来世への信仰も存在するからである。それ故に、『千手経』をただの雑密の經典であると評価してはいけなくとも、すくなくとも、「古本千手経」に限定していえば、雑密の經典であるとは言えない。すでに、拇尾祥雲も智通訳本<sup>11)</sup> の『千手経』に対してこのような差別性が認めたと「これ明らかに願意の向上と密法内容の進歩とを示すものである。」<sup>12)</sup> と述べている。確かに、この点で「古本千手経」は現世利益や祈福的次元を超えて、大乘仏教の姿を持っていると言え得る。密教思想は「古本千手経」に現れている一番目の思想である。

次に、「正宗分」に現れている観音の発願に対して考察してみたい。そこには『無量寿経』の浄土思想の影響が認められることを見過ごしてはいけなく、以下に、三つの証拠を挙げたい。

第1に、十大願の部分<sup>13)</sup> を分析すれば『無量寿経』のように定型化されていないが、その中に「我誓不成正覚」という句節のある願が四つである。

②世尊、若諸衆生、誦持大悲神呪、墮三惡道者、我誓不成正覚。

③誦持大悲神呪者、若不生諸佛國者、我誓不成正覚。

④誦持大悲神呪者、若不得無量三昧・弁才者、我誓不成正覚。

⑥若諸女人厭賤女身、欲成男子身、誦持大悲陀羅尼章句、若不轉女身成男子身者、我誓不成正覚。生少疑心者、必不果遂也<sup>14)</sup>。（番号は引用者による。）

これらを私は②不墮惡趣願、③生諸佛國願、④得定弁才願、そして⑥轉女成男願などと呼ぶ。これらの四つの場合を見れば、たとえ他の六つの願文にそのような表現がないとしても、この十大願全体は、もし本願が成就しなければ正覚を成

就しないという意味が含まれていると考えられる。これらは「設我得仏一不取正覺」の構造を持つ『無量寿経』の四十八願<sup>15)</sup>を想起させるのに充分である。このようなことから、十大願を四十八願と対比させていきたい。これらの叙事構造の比較をあらわしたのが次の〈表1〉である。

〈表1〉：『無量寿経』と『千手経』との叙事構造

|      | 本生時の名前 | 本師      | 本願   | 成就    | 法門  |
|------|--------|---------|------|-------|-----|
| 無量寿経 | 法蔵菩薩   | 世自在王如来  | 四十八願 | 阿弥陀佛  | 念仏  |
| 千手経  |        | 千光王静住如来 | 十願六向 | 観世音菩薩 | 陀羅尼 |
|      |        | 阿弥陀佛    | 十大願  |       |     |

〈表1〉で確認できるように、その内容においては差があるが、構造はまったく一致している。特に、本師が阿弥陀仏という点までを考えれば『千手経』に及ぼしている『無量寿経』の影響は否定できない。むしろ、後代の信仰史では千光王静住如来の存在は薄くなっており、阿弥陀仏だけが浮き上がっている。

第2に、『千手経』の十大願に現れている意味を考察してみると『無量寿経』の四十八願と対比して考える必要がある。このため、私は十大願の一つ一つに名前を付けて、それと関係があると思われる『無量寿経』の四十八願<sup>16)</sup>を対比させていく。これらの対比を表に現れると、次のようである。

〈表2〉：十大願と四十八願の対比

| 十大願    | 四十八願       | 関係 |
|--------|------------|----|
| ①臨終往生願 | 第 18 念佛往生願 | 包含 |
| ②不墮惡趣願 | 第 2 不更惡趣願  | 同一 |
| ③生諸佛国願 | 第 18 念佛往生願 | 包含 |
| ④得定弁才願 | 第 29 得弁才智願 | 類似 |
| ⑤所求成就願 |            |    |
| ⑥転女成男願 | 第 35 女人往生願 | 同一 |
| ⑦誦呪懺悔願 |            |    |
| ⑧対師懺悔願 |            |    |
| ⑨重罪消滅願 |            |    |
| ⑩得善避惡願 |            |    |

十大願を立て、千手陀羅尼を誦誦して仏国へ往生しようと言う。この中で最も重要なことは四十八願の念佛往生願が含まれている①臨終往生願と③生諸佛国願などがあるということである。ただ、これはまだその佛国が阿弥陀仏の国土という表現は明記されていない。両者は佛国への往生を志向することでは同一であるが、その方法には差異がある。念佛から陀羅尼の誦誦へと変化しているのである。

第3に、具体的に「本師阿弥陀仏」と「阿弥陀仏国」という表現が現れている。「古本千手経」には、「亦応専念本師阿弥陀仏」<sup>17)</sup>として帰依弥陀を語っているし、本稿の範囲はないと言っても「附加部分」で「命終、往生阿弥陀仏国」という表現もあるからである。これらの例を通して見れば、浄土思想の影響が認められることは勿論である。これらの特徴は『誦誦用千手経』で千手陀羅尼を誦誦する前に「南無本師阿弥陀仏」を三唱していること<sup>18)</sup>にも見られる。このような点から『誦誦用千手経』が『原本千手経』の立場をよく継承していると評価される。

最後に、流通分である。流通分はさきに引用したが、その中に注目したいところは「或得一地二地三地四地五地、乃至十地者。」という部分である。十地思想が現れている。ところが、この十地思想がどのような十地思想かという点、事実この流通分の文章だけでは判断できない。十地の名前も省略されているし、各々地において行すべき実践徳目に対しての言及もないからである。このために、正宗分に出てくるもう一つの文章を共に考えてみたい。観音が千手陀羅尼を得た因縁を語っている中で「我於是時、始住初地、一聞此呪、故超第八地。」<sup>19)</sup>という文章である。短い文章であるが、重要な意味が含まれている。流通分と正宗分で説かれている十地に関連する二つの文章をともに考えてみたい。結論的にいえば、「古本千手経」の十地思想が華嚴の十地思想と理解できると私は考える。

第一に、十地思想の基本構造が「漸次に向上してゆく粹組構造」<sup>20)</sup>といえ、流通分の文章でそのような点を読み取れるからである。「古本千手経」の法門を聞く聴衆の中で十地の菩薩道を漸次的に踏まえる人々もあったということである。各々地位に、数多くの実践徳目をおこなうことは当たり前であろう。この特徴は最初に本生十地の段階から華嚴十地まで一貫されていた。その故に、具体的に華嚴の十地と言ひ難いかもしれない。しかし、華嚴の十地は以前の十地思想の集大成<sup>21)</sup>といわれるので、最後の段階である華嚴の十地として説明しても宜しいとわたしは考える。

第二に、正宗分の文章で「一聞此呪、故超第八地」と述べている。第八地は不退転地、すなわち不動地である。これはまさに、十地説の真意は「不退転地とい

うことをこそ目標とする」<sup>22)</sup> というからである。ところが、ここで最も重要なことは初地において千光王静住如来から「廣大円満無碍大悲心陀羅尼」を聞いて、さっそく第八地へ超えたという点である。ここには、漸進的な向上という十地思想の基本構造とは合わせていない。禅宗の言葉でいえば、漸修的ではなく頓悟的である。これも「古本千手経」に現れている十地思想が華嚴の十地思想というも一つの証拠である。

勿論、前述したように十地を一步一步前進しながら、無尽の菩薩行を行うことも華嚴思想である。しかし、「初発心時便正覚」という思想は最も華嚴に明確に表現されていたからである。

このように、『千手経』の中で華嚴の十地思想が現れていると見る事ができれば、『千手経』を菩薩行の観点から見ることもできると思う。これはまた『無量寿経』の立場と相通じるのである。観音の行願は、法蔵比丘の「莊嚴佛土清浄之行」<sup>23)</sup> に異なるものではないからである。このような現世的な菩薩行としての観音行の理解を通じて、『無量寿経』と『華嚴経 (十地経)』<sup>24)</sup> の思想が『千手経』の中に組み合わせられていると見ることも出来る。

- 
- 1) 『読誦用千手経』は韓国仏教の各種儀式に活用されているので、その全文は殆どの勤行集などに載せられている。したがって、特定の参照文献を表記しない。
  - 2) 『千手千眼観世音菩薩広大円満無碍大悲心陀羅尼経』(1巻, T.1060, 大正蔵 20, pp.106-111.) 訳出の年代は唐の高宗の永徽年間 (650-655) であると『宋高僧伝』は伝える。野口善敬, 『ナムカラタンノーの世界 —— 千手経と大悲呪 —— 』(京都: 禅文化研究所, 2000), pp.201-202. 参照。
  - 3) 大正蔵 20, pp.107c-108a.
  - 4) 上掲書, pp.106a-108a3 行。
  - 5) 用語の混乱が起きるかもしれないので、ここで明確したい。『原本千手経』は『読誦用千手経』と相対する概念であり、「古本千手経」は「附加部分」と相対する概念である。
  - 6) 不空訳本の性格に対しては野口善敬, 前掲書, pp.229-230. 参照。
  - 7) 『千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼』(1巻, T.1064, 大正蔵 20, pp.115-119.)
  - 8) 科目ということは、テキストのある部分を全体と関連しながら、その意味を把握することをいう。したがって、全体の中で部分を見、部分から全体を見る。いわゆる、現代解釈学の解釈学的な循環である。
  - 9) 「如是我聞 —— 密放如是大神通」(大正蔵 20, p.106a-b.)
  - 10) 「南無大悲観世音, 願我速知一切法 —— 南無大悲観世音, 願我早同法性身」(大正蔵 20, pp.106c) を十願と呼び、「我若向刀山 —— 我若向畜生, 自得大智慧」

(pp.106c.-107a.) を六向と呼ぶ。これは『白華道場発願文』（『韓国仏教全書』6冊, p.574a.）の用語法である。

- 11) 『千手千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』（2巻, T.1057, 大正蔵 20, pp.83-89.）
- 12) 拇尾祥雲, 『秘密仏教史』（東京：隆文館, 昭和 56 年）, p.59.
- 13) 大正蔵 20, p.107a.4 行 -107b.20 行.
- 14) 上掲書, p.107c.
- 15) 『無量寿経』（T.360, 大正蔵 12, pp.267c-269b.）
- 16) 『無量寿経』の四十八願に対しての名前は了慧（1243-1330）によって書かれた『無量寿経鈔』のことである。坪井俊映, 『浄土三部経概説』（京都：法蔵館, 1996）, pp.86-89. 参照.
- 17) 大正蔵 20, p.107a.
- 18) 以外にも, 『讀誦用 千手経』には「願我決定生安養, 願我速見阿弥陀」という句節がある。そこにも, 浄土思想の影響が現れている。
- 19) 上掲書, p.106c.
- 20) 荒牧典俊, 「十地思想の成立と展開」, 『講座大乘仏教 3, 華嚴思想』（東京：春秋社, 昭和 58 年）, p.89.
- 21) 上掲書, p.108.
- 22) 上掲書, p.90.
- 23) 大正蔵 12, p.267c.
- 24) 『十地経』の成立年代は 1-2 世紀であり（『佛典解題事典』（東京：春秋社, 1993）, p.86）, 『無量寿経』の場合, すくなくとも 1-2 世紀, 或いは 2 世紀以前（上掲書, p.88）と考えている。勿論, 『千手経』はもっと後代に成立された。成立年代の推定は拙稿, 前掲論文, 『仏教学報』 第 40 輯, p.56. 参照.

〈キーワード〉 『千手経』, 『原本千手経』, 『読誦用千手経』, 『無量寿経』, 「古本千手経」, 伽範達摩, 不空, 密教, 浄土, 華嚴, 十地, 陀羅尼, 十大願, 四十八願.  
 （東国大学校教授, 哲博）

his disciples and lay Buddhists accordingly. His thoughts mainly developed focusing on reciting the names of Buddha (称名念佛), Buddha Contemplation (観念念佛), and mind of Pure Land (唯心淨土). In particular, he composed the 'Söngwōka' (僧元歌) of Kasa (歌辭), which was written in Korean language expressed in Chinese characters (I du munch'a 吏讀文字) in order for lay people to understand more easily. However, he did not present a kōan method for Buddha Contemplation Sōn (念佛公案法). His Dharma song which begins with "Where is Amita Buddha (阿彌陀佛在何方) —" is always recited in liturgical services and the grand Buddha Contemplation ritual in Korea today, and it is generally recited as a representative Dharma song of Buddha -Contemplation Sōn (念佛禪).

**94. On the Thoughts of the *Thousand-armed Avalokiteśvara-Sūtra* Translated by Bhagavaddharma**

Ho-sung KIM

It is said that *the Thousand-armed Avalokiteśvara sūtra* translated by Bhagavaddharma could be divided into two parts: 'the original part' and 'the additional part'. The scope of this article is limited to the former, the original part. Although this *sūtra* has been known to belong to esoteric Buddhism, this original part actually shows not only esoteric Buddhist thought but also the Pureland idea and *Daśabhūmi* concepts of the *Avatamsaka sūtra*. These three kinds of Mahāyāna Buddhist thought seem to have been harmonized in this part of the *sūtra*, which influenced strongly the establishment of the 'Recitation Version' of the *Thousand-armed Avalokiteśvara sūtra* created in Korean Buddhism.

**95. The Reception and Development of the Pagoda in Koguryō**

Choon-ho KIM

When thinking of pagodas in Koguryō, the first question that comes to mind is where the first pagoda can be found. Also, the origin of the charac-